

「ケド」で言い終わる文

白川 博之

Sentences ending with *-kedo*

SHIRAKAWA, Hiroyuki

キーワード：接続節、「ケ(レ)ド」、言いさし、言い終わり、条件の提示

1. はじめに

日本語のくだけた談話(特に話し言葉)においては、次のように接続助詞「ケド」で言い終わる文がしばしば観察される。

(1) [早苗が入ってくる]

早苗「失礼します。会議が、もう始まるそうですですけど……」

正樹「え? (と、時計を見る) あ…… (忘れていたのだ)」

(男たち、45)

(2) そのとき私が聞かれたのは、「小津の映画をどう思うか」ということだったのです。私が「小津安二郎は日本を代表する映画作家だと思いますけれど」と答えると、「僕はそう思わないね、カメラを動かさずにパンもしなければ、移動もしない。黒澤明のようにもっとダイナミックに映画という機能を使えばいいのに、あいつは全部の機能を封じている、あんなのが映画かね」というのです。

(語法、73)

このような「ケド」は、いわゆる「言いさし」の一種とされ、後続するべき主節が省略あるいは言わずにおかれたものとみなされることが多い。¹⁾ さもなければ、終助詞として(あるいは「終助詞的に」)使われているという説明を受けることが常である。²⁾

わたくしは、このような「ケド」は「言いさし」などではなく、文の「言い終わり」の形の一つだと考える。「言い終わり」が「言いさし」とどう違うのかということは、後で説明するとして、接続節によって文が終わっているものすべてを「言いさし」と一括りにするのは、個々の接続語句が持つ本来的な意味・機能の違いを無視した粗略な扱い方である。

ある種の接続節が「言い切り」の形の文と等価の機能を持つという考え方は、新しいものではない。

国立国語研究所(1950)は、文を終止させる形の一つとして、接続助詞による言い終わりの形を認知した先駆的な研究である。

また、ほぼ同時代に、三上(1955)が、「～カラ」と「～ガ」の係り結びの仕方を、それぞれ、「～タメニ」と「～ノデ」、「～クセニ」と「～ノニ」、と比較して、「～カラ」「～ガ」と主節との継目は「割れやすい継目だ」(p.274)という示唆的な指摘している。「割れやすい」とは、続く形でありながらそこで一旦切れているということであり、その洞察力に感嘆する。

最近では、南(1993:217-9)が、C類の従属句(「～カラ」「～ガ」「～ケレド(モ)」「～シ」「～チ」)に「～ゾ」「～ノ」「～ワ」「～カ」といった文末表現と同等の機能(南の言葉で言うと「提示構造」)があることを主張している³⁾(ただし、南(1993)では、それが具体的にはどのような機能なのか、また、当該の従属句が本来的にそのような機能を持つのか、個々の従属句の間でどのような違いがあるか、といった具体的な論点について、論証はされていない。)

この論文では、「ケド」を考察対象にして、まず、接続節による文の終止に「言い終わり」とみなしうるものがあることを論じ、続いて、「ケド」の「言い終わり」の用法のいくつかのタイプについての記述を試みたい。「言い終わり」の用法ばかりを重点的に観察することによって、「ケド」節それ自体が本来的に持っている機能を浮かび上がらせようというのがこの論文の狙いである。

なお、「ケド」の他に、「ケレド」「ケレドモ」という形があるが、これらは「ケド」の変異体(variant)と考え、「ケド」と同等に考察の対象とする。また、必要に応じて「ガ」も考察の対象に入れる。その場合、「ケド」と「ガ」の違いは捨象して考える。

2. 接続節による「言い終わり」とは？

従来、「言いさし」、あるいは、主節の「省略」と呼び慣わされてきたものを文法的に区別するために、判別の手立てとして次の条件を設定する。

- ①形式上、後件が表現されていない。
- ②後件を言わずに、言い終えている。
- ③後件が談話文法的な規則で省略されている。すなわち、後件を文脈情報から復元することができる。

①は、「言いさし」（あるいは主節の「省略」）と言われるものならばすべて備えている性質である。

②は、多少、説明を要する。形式上、文がそこで言い終わっていることと、文の意味が「言外の意味」の助けを借りずに表現され切っていることとは、別物である。「言い終えている」とは、後者の場合を指して言う。

③については、特に説明はいらなと思うが、言ってみれば、「見えない後件」がある場合、とでも言えようか。

以上3つの条件それぞれを満たすか満たさないかによって、いわゆる「言いさし」（あるいは主節の「省略」）と呼ばれる文は、3種類に下位分類される。

	Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ
条件①	+	+	+
条件②	+	+	-
条件③	+	-	-

それぞれのタイプの「言いさし」文が具体的にどのようなものであるかを見てみよう。

まず、Cタイプから。たとえば、次のような例がこれに当たる。

- (3) 正樹「今日泊まっていけよ」
 慎平「そうしたいんだけどね（溜め息をつく）」

(男たち、29)

- (4) 恵子「恋愛なんてサ、恥かかないでモノにできるほどナマやさしくないよ。」
 みのり「わかってるけど……。」

(ひらり①、184)

(3)も(4)も、話し手は、後件を言わずに「言葉を濁して」いる。表現されなかった後件の内容は、聞き手の側で見当をつけなければならない。このような意味で、Cタイプは、「言い残し」と呼ぶのが最も確かな性格づけだと思われる。3つのタイプの「言いさし」のうちで、本当の意味で「言いさし」と言えるのは、このタイプだけである。

Aタイプは、「言い残し」がなく、なおかつ、後件が文脈から復元されえるもので、「ケド」の例で言えば、次のような文である。

- (5) 松永「慎重だねえ。なかなか返事しないんだなあ」

香織「——(苦笑)」

松永「見かけと違うなあ、あんた、ほんとは」

香織「そうですか」

松永「イヤならイヤって、ケロっと思えちゃうような顔してるけどな」

(想い出、88)

- (6) 響子「どおすんのお、マクラ届けに来るって言ってるわよ。」

響子の母「冗談だったんだけどねー。」

(めぞん⑧、39)

Aタイプは、「言い残し」たものがないという点でBタイプと似ているが、後件の内容がないのではなくて省略されているという点でBタイプと異なる。そこで、このタイプを「省略」と呼ぶことにする。

最後に残ったBタイプの例が、この論文で取り上げようとする「ケド」である。便宜のために、冒頭に挙げた例を再掲する。

- (7) 早苗「失礼します。会議が、もう始まるそうですけど……」

正樹「え？(と、時計を見る)あ……(忘れていたのだ)」

(=11)

(7)では、表記上は「けど……」となっており、あたかも「言い残し」があるかのような印象を与えるが、実際は、「言い残し」は全くない。すなわち、話し手の「早苗」が聞き手に伝えたかった内容は、「会議がもう始まるそうだ」ということに限られており、「～してください」とか「～ですか」とか、後件で言いたいことを言わずに言葉を濁していると考えなければならない理由は全くない。かと言って、Aタイプのように後件が「省略」されているのでもない。

「早苗」は、「ケド」という形で文を言い終えているのである。そこで、このようなタイプを「言い終わりの」「ケド」と呼ぶことにする。

さて、「言い終わりの」の「ケド」節は、なにも、(7)のように「終助詞的」なものに限られるわけではなく、次の例のように、「終助詞的」というよりはむしろ「倒置」と見紛うものもある。

(8)響子「なんで学生服なんて、持ってるんです？」

五代「はあ…予備校の入学式に着てくればあちゃんが送ってきたんですよー、結局着なかつたけど。」

(めぞん⑤、178)

この文が「倒置」でないことは、「ケド」節を主節とおぼしき節の前の位置に戻しても、うまく文意が繋がらないことから、明らかである。³⁾

(8)??結局着なかつたけど、ばあちゃんが送ってきたんですよー。

「倒置」でないとなると、後件が「省略」されているという見方はできない。しかし、「言い残し」があるとも感じられない。だとすると、上に述べた条件に照らして、(8)のような「ケド」節も「言い終わりの」だということになる。

また、次のように文中に挿入的に用いられる節も、先の基準に照らし合わせると、「言い終わりの」用法と考えられる。

(9)そうしているうちに、いつの間にか中学で一番か二番になるまで速くなっていたのです。長距離をやって、マラソン——いまのフルマラソンではないですが——をやって、いつも校庭を出て最初に戻ってくるのは私だったのです。

(語法、41)

このように、「言い終わりの」の「ケド」節は、生じる位置の違いによって、さらに、少なくとも次の3種類の用法に分類することができる。

- ①「終助詞的」な用法 (例:(7))
- ②「倒置的」な用法 (例:(8))
- ③挿入的な用法 (例:(9))

これら3つの用法は、後で詳しくみるように、意味・機能にかなりの違いがある。しかし、わたくしの見るところ、この違いは、生じる位置の違いによる派生的なものであって、本来的な機能はみな同じ

である。3つの用法が、すべて、わたくしの言うところの「言い終わりの」の用法と認定できることも、偶然ではないと考える。

「ケド」に関するこれまでの研究においても、上の3つの個々の用法について、指摘・記述は行なわれているが、3者の現象的な違いに目を奪われて、すべてを統一的に説明しようとする試みは、わたくしの知るかぎり、見当たらない。⁴⁾

以下の節では、「ケド」節の機能について、それぞれの用法に分け入って詳しく考察することにする。3つの用法すべてを見渡すことによって、個々の用法についても、見えてくるものがあるはずである。

3. 「倒置的」な用法

「言い終わりの」の「ケド」節の3つの用法のうち、「倒置的」な用法から考えて行くことが、「ケド」節の「言い終わりの」性を考える上で有効だろう。

繰り返しになるが、「倒置的」な用法は、本当の倒置の用法とは異なる。本当の倒置の用法とは、次のようなものを言う。

(10)五代「もうきみとは付き合えない！」
こずえ「……」

五代「ほくには、好きな女がいるんだ。きみには本当に申しわけないけれど…」

(めぞん⑬、15)

(10)は、構文的には、(10')から派生したものとして説明できる。

(10')きみには本当に申しわけないけれど、ほくには、好きな女がいるんだ。

(10')の後件が省略されたものが(10)の「ケド」節だと言える。⁵⁾これは「言い終わりの」ではない。

「倒置的」ではあるが「言い終わりの」であるような「ケド」節とは、次のようなものである。

(11)響子「あの……あたしが運転していいかしら。」

三鷹・五代「えっ!!」

郁子「なーんだ、おばさま免許証持ってたの。」

響子「ええ一応……まさか使うことになるとは思わなかつたけど。」

(めぞん②、60)

(12)根本「お前はゆき…女房 [注:洋一の妻] に関心あるのか」

洋一「……ないな。……だからって不倫し

たりする気もないけどな。」

(ひらり①、196)

- (13) 銀次「下町だってもうニューヨークと区別つかねえもんな。行ったことねえけどよ、ニューヨーク。」

(ひらり①、116)

- (14) こずえ「五代さんてね……」

響子「はい？」

こずえ「あたしの初恋の人にそっくりなんですよ。」

響子「まあ!!」

こずえ「あたしが一方的に憧れてただけなんだけれど。」

(めぞん②、193)

前節で述べたように、このような「ケド」節は、統語的には先行の文を後件とする倒置構文のように見えるが、「倒置」からもとの文に戻そうとしても、戻しにくい。「ケド」節が、いわば、別個の独立した文のように振る舞っているわけである。

このような「ケド」節は、先行の文で話し手自身が言ったことを補正する機能を持つ。もっと言えば、先行する文から聞き手が導き出すかもしれない含意(implicature)をキャンセルするために、但し書き的に付加される。⁹⁾

(11)を引き合いに出して説明しよう。直前の文で、話し手(=「響子」)は、自分が免許証を持ってきたことを明らかにする。しかし、そのことは、「自分も運転するつもりで持ってきた」ということを含意する可能性がある。そのように聞き手に受け取られることは話し手の本意ではないから、それに気付いた話し手は、その含意を「ケド」節を使って打ち消した、というわけである。

「倒置的」な(11)と、本当の倒置構文である(10)と比較してみると、「但し書き」的に付加されている点では似ているが、先行する文にある種の訂正を加えているか否かが異なる。(10)では、前言の補正にすぎないが、(11)では、補正というにふさわしい言い直しを行なっている。言ってみれば、先行する文と「ケド」節とでは、言っている内容が微妙にずれるわけで、そう考えると、本当の「倒置」のように、もとの語順に戻せないのも、道理である。

前言の補正という発話態度は、時として、「ケド」節の文頭の接続語句によって明示される。その例が(12)である。「だからって」という接続語句は、「だからとって」の縮約形であり、文末の否定表現と

呼応して、当該の発話が先行する発話の含意をキャンセルするためのものであることを明示している。類似の働きをする表現としては、「かと言って(…ない)」「と言っても(…ない)」「もっとも(…ない)」などの表現がある。これらの接続語句が文頭に来得ることから考えても、この種の「ケド」節は、先行する文に倒置的に係るのではなく、別個の文として独立して発話されたものであることがわかる。

このことは、後接する主節がなくても、「ケド」節がそれ自体で何らかの条件を提示する機能を持っていることを示唆する。上の例の場合は、話し手が、先行する文を言い切ってしまったあとで誤解の可能性に気付き、条件を提示して聞き手の側での可能な解釈の範囲に制限を設けていると考えられる。

このように、「倒置」と似て非なる「ケド」節は、前言の補正のために先行する文から独立して発話される別個の文であるので、場合によっては、前言とは逆の趣旨と取れるような文になることさえある。

- (15) 三鷹の叔父「(見合い写真を見せながら)

どうだ。なかなかの美人じゃないか。」

一ノ瀬「へー、若くて可愛いーじゃない。

ちょっとトロそうけど。」

響子「一ノ瀬さん、失礼じゃありませんか。」

(めぞん⑩、120)

- (16) ひらり「お母さん、よくお父さんと外食する気になったよね。」

みのり「そりゃお父さんだって同じよ。でもサ、親方のご招待じゃ断れないもん」

ひらり「たまにさそってくると、夫婦円満でいいよね。ま、こっちは夕食作るのは疲れるけどサ。」

(ひらり①、168)

(15)では、「一ノ瀬」は、見合い写真の主のことを、先行文では、誉めておきながら、「ケド」節では、一転して貶している。また、(16)でも、「ひらり」は、両親が外食して留守であることについて、先行文ではプラスに評価しているのに、「ケド」節ではマイナス面を挙げている。

ここで注目すべきことは、「完全文」(「S₁ケドS₂」という形の文)における「ケド」節の使い方との違いである。確かに「完全文」においても、前件と後件に対立するような内容が来る場合(=「逆接」用法)はあるが、その場合でも、文全体の主張は一貫している。すなわち、前件と後件は対等なのではなく、後件のほうが文全体で言おうとする主張なの

である。

次の2文を比較されたい。

(17) a. あの店、おいしいね。ちょっと高いけど。

b. あの店、ちょっと高いけど、おいしいね。

bは、結局、その店を良く評価しているが、aは、そう単純な意味ではない(2文目の前に「まあ」などの間投詞を置いたり、文末に「ね」のような終助詞を置くと、さらにその傾向が強まる。) bの文の含意は、次のcの意味に近いことがある。

(17) c. あの店、おいしいね。でも、ちょっと高いね。

この違いは、「ケド」節に単独で(つまり「主節」の存在の有無に関わらず)条件を提示する機能を確認することで合理的に説明できる。すなわち、(17a)では、第1文から聞き手が汲み取るであろう含意(話し手がその店を誉めているということ)を、「ケド」節で条件提示することによって、キャンセルしているわけである。それに対して、(17b)では、話者は、あらかじめ条件提示をした上で、その店を誉めている。すなわち、手放しではなく条件つきで、しかし、結局誉めている。

2文の意味の違いは、どの段階で条件提示をするかの違いであり、条件を提示されるによって聞き手側の知識の状態に変更もたらされるか否かの違いである。

なお、「倒置的」な「ケド」節の機能を、「前言の補正」ないしは「但し書き」という、より具体的なものにせず、「条件の提示」という抽象的なものに見定めたことには意味がある。あとの節で見ると、「言い終わり」の「ケド」節は、「但し書き」的なものに限られない。この節で見た「倒置」的な用法の場合は、たまたま、補正されるべき文の後に「ケド」節による条件提示が行なわれるために「但し書き」的な用法として解釈されただけである。このことは、後の節、とりわけ「言いさし」用法について論じるときに、再確認されるだろう。

4. 挿入的な用法

「ケド」節に挿入的な用法があることは、半世紀近くも前に、国立国語研究所(1951:48)がつぎのような用例つきで指摘している。

(18) さうすると、突如として陛下は、日本人は

(或いは日本民族はとおっしゃったのかも知れぬが、その辺はよく憶えないけれども)
南方から来たといふぢゃないかね、といふ様なお言葉があった。

同書の説明によると、例文の傍線部は接続助詞であり、これは「補充的挿入を表わす」(p.48)という。

しかし、その一方で、同書は、次のような「ケド」節は、終助詞としての用法の方に分類している。

(19) 「口にさせないで、きっと違ちゃんは、悩んであると思ひますわ。お気の毒に」「でも仕方ないんですもの。気にはしてますけど」

(同書、p.50)

わたくしは、(18)も(19)も、後件がない「言い終わり」の「ケド」節であるという点では同じであると考え。一方を「接続助詞」、他方を「終助詞」として文法的に区別する根拠は全くない。

類例を挙げよう。

(20) 確かに有名中学、有名高校というのもけっこういいところがあるんですね、わりかた楽しいところがありますし。ところが、うまいこといけばうまいんですけど——あたりまえの話ですけど。(笑)やっぱりうまいかないところがあるんですね、それは人さまごまで。

(ものぐさ、94)

(21) そうしているうちに、いつの間にか中学で一番か二番になるまで速くなっていたのです。長距離をやって、マラソン——いまのフルマラソンではないですが——をやっても、いつも校庭を出て最初に戻ってくるのは私だったので。

(=9)

このような挿入的な「ケド」節も、言ってみれば、前節で見たような「但し書き」の機能を担っている。

しかし、「倒置的」な「ケド」節と比べると、挿入的な「ケド」節は、生じる位置が自由である。「倒置的」な「ケド」節は、補足ないしは補正されるべき文の直後に発話されるが(だから「倒置」と見紛う)、挿入的な「ケド」節は、補足(補正)が必要だと思われた段階で、補足(補正)されるべき語句の直後に、自由に生じることができる。たとえば、上の(20)では、他の「ケド」節を補足しているし、(21)に至っては、「マラソン」という名詞を補足している。

こうなると、もはや、「ケド」節に続く主節は何か

と考えることは全くナンセンスであり、話し手は、「但し書き」を入れたくなった箇所で「ケド」節をはさみ、条件提示を行なっているのだ、と考えるのが自然だろう。挿入節の用法こそ、「ケド」節には、主節を伴わなくてもそれ自体に条件を提示する機能があることを物語っている。

5. 「終助詞的」な用法

以上の議論を踏まえれば、「終助詞的」な用法が、「言いさし」ではなく、「言い終わり」であるということ、比較の容易に理解できるだろう。

議論に入る前に、用例を追加しておこう。

(22) 美千子「ありがとうございました」

医者「風邪の一種だと思いますけど……」

美千子「そうですか……」

医者「解熱剤を打っておきましたから、もしこれ以上ひどくなるようでしたら、連絡してください」

(男たち、132)

(23) 響子「あの…三鷹さん私…アパートに電話したいんですけど。」

三鷹「は？ どうしてですか？ 子供じゃあるまいし。」

響子「と、とにかくみんな心配してると思うので…」

三鷹「はあ…」

(めぞん⑩、82)

(24) 慎吾「福島から、電話なかったか？」

香織「なかったけど」

慎吾「そうか」

(想い出、185)

このタイプの「ケド」については、多くの先行研究で記述・説明が試みられてきた。論者の大半はこの種の表現のニュアンスの記述に関心があり、共通して指摘していることをまとめれば、「ケド」節で言い終わると、聞き手に対して柔らかく（あるいは婉曲的に）持ちかけるような表現効果が生じる、ということである（たとえば、国研（1951：49）、森田（1989：410）、神尾（1990：56-7）、益岡・田窪（1992：206）、南（1993：220））。

たしかに、「ケド」が付かない言い切りの形と比較すると、遠慮がちに持ち掛けている感じがするし、また、「カラ」「ヨ」といった、他の文末表現と比較しても、柔らかい感じがする。

(23') アパートに電話したいんですけど。

(1') 失礼します。会議が、もう始まるそうです
{けど/から/よ}

しかし、なぜ「言いさし」的な表現なのに完結性があるのか、また、なぜそのような表現効果が生じるのか、という疑問に正面から答えようとした試みはほとんどないと言ってよい。

そのような中で、水谷（1989）、福田（1994）、三原（1995）は、問題意識を共有するものとして検討に値する。

5.1. 「相手に続きを言わせている」のか？

水谷（1989）によると、接続節による「言いさし」（水谷の言葉で言えば「省略」（leaving unsaid））は、「自分の発話を完全なものとして言い尽してしまわずに、相手にその先を言わせようとする（p.56）」ものであり、次のようなやりとりと、原理は同じだと言う。

(25) A：じゃ、そろそろ……

B：でかけましょうか。

(上掲書 p.57)

いわば、歌舞伎の「割りゼリフ」のように二人で共同して一つの文を作るという考え方であり、統語構造上の不完全さを説明できるという点からも都合の良さそうな説明に見える。

しかし、少なくとも、接続節による「言いさし」に関するかぎり、この説明は、説得力に欠ける。水谷自身が挙げている例を使って点検してみよう。

(26) 夫：ただいま。

妻：お帰りなさい。

夫：ああ、つかれた。

妻：おふろがわいているけど。

夫：あとではいろいろ。(IMJ p.208)

(27) (町かどでおみこしを見た知人2人の会話)

A：このごろはなんだか観光目的のお祭りがふえたようですけど。

B：ええ、そうですね。神さまよりお金もうけてって感じのお祭りも多くなりましたね。(IJI p.49)

(以上、上掲書 p.59)

(26)において、「夫」は、「妻」の発話の省略部分が続けたわけではない。その証拠に、二人の発話を一文にまとめると、意味が変わってしまう。

(26') #おふろがわいているけど、あとではいろいろ。

(27)についても同様なことが言える。

(27)??このごろはなんだか観光目的のお祭りがふえたようですけど、神様よりお金もうけてって感じのお祭りも多くなりましたね。

したがって、この説明には、そのまま従うわけには行かない。

5.2. 「相手伺い」か?

福田(現・三原)(1994)、三原(1995)は、「ケド」による「言いさし」(三原自身は「終助詞的用法」と呼んでいる)について詳しく考察した好論である。三原(1995)によると、談話の中で終助詞的な「ケド」は、次のような基本的な機能を持つという。

「ケドモ文が談話の中で使われる場合、聞き手に対し、話し手の意見や願望、また聞き手にとって行動を起こすきっかけとなるような情報を提示し、“どうですか”“いかがですか”“どうでしょうか”等”のニュアンスを相手に与える用法で使われることが多い。」

(三原(1995:81))

発話の意図としては相手に何かをさせようとして言うのであるが、直接働きかけているのではなく、聞き手に「こうなのだが、どうだろうか」と問いかけていて、という趣旨であって、もしこれが正しいとすると、非直接的な発話行為という観点から、「柔らかな持ち掛け」というニュアンスが説明できるかもしれない。

しかし、この説明は、前半部分は良いが、後半部分に問題がある。

まず、「終助詞的」に使われた「ケド」節は、必ずしも「相手伺い」ではないという事実がある。

(28)こずえ「ほかにつきあってる女の子いるのかしら?」

響子「さあ…あなただけみたいですよ。」

こずえ「ほんとはですか!!」

響子「ええ。」

(めぞん②、188)

(29)みのり「つきあった頃は話があったんでしょ?」

ゆき子「あった……。会えるのが嬉しかったし、黙っていても楽しかったし。……

あの頃はやっぱりお互いに何とか好かれ

ようと思ってたからよね。」

みのり「私、今だってお父さん、結構ステキだと思うけどな。」

(ひらり①、204)

(30)のお代「どうして?」

久美子「ま、どうってことないけど」

のお代「気になってたの」

久美子「気になって?」

のお代「うん。ただ、どうしてるかなあ、と思って」

(想い出、99)

(31)慎吾「福島から、電話なかったか?」

香織「なかったけど」

慎吾「そうか」

(想い出、185)

(28)~(30)は、たしかに、「ケド」節で言い終わることによって相手に会話のturnを渡している感じはするけれども、だからといって、「それがどうかしましたか?」とか「あなたはそう思わない?」といったような「相手伺い」の気持ちがこめられたものだと考えにくい。(31)についても、イントネーションによっては(上昇イントネーションで発話されれば)、「相手伺い」の意味に解釈されうるが、それは、必ずそうなるというわけではない。”)

要するに、三原(1995)では、「情報を提示する」ということと「聞き手に伺いを立てる」ということを切り離して考えずに、後者をも(をこそ?)基本的な機能と考えたことにより本質を見失っている。

5.3. 「条件の提示」という機能

しかしながら、三原(1995)の議論のうち、「ケド」節が「聞き手がその行為を行なうための判断材料となるような情報を提示する」(p.82、傍点は白川)という認識は、共有できるものである。*)

白川(1995)は、理由を表わさない「カラ」の用法について論じ、「S₁カラS₂」において「S₁は、S₂を聞き手が実行に移すのを可能にしたり、促進したりする情報として提示される」(p.212)と結論したが、この「カラ」の機能は、ここで論じている「ケド」の機能と部分的に重なる。すなわち、「カラ」も「ケド」も、S₁を「聞き手が何かをするために参考になる情報として提示している」(同上、p.207)という点で共通しているのである。

ここで、簡便のために「何かをするための情報」を「条件」と読み替えるならば、「カラ」も「ケド」

も、聞き手に条件を提示していると言える。

ただし、「条件の提示」の仕方が、「カラ」と「ケド」とで違うことは確かである。たとえば、次の2文のニュアンスの違いを観察されたい。

(32) a. 会議が終わりましたから。

b. 会議が終わりましたけど。

(32a)には「だから、～してください/～しないでください/～しませんか/…」といった、相手に何かをさせようとする意図が感じられるが、(32b)にはそれが感じられない。

「ケド」で条件を提示した場合、それこそ、「条件を提示」しているだけである。すなわち、「聞き手が何かをするために参考になる情報として提示している」に過ぎない。「柔らかな(婉曲的な)持ち掛け」というニュアンスは、ここから生じると考えられる。

この違いは、何に起因するのか。

「カラ」にまつわる「相手に何かをさせようとする意図」は、「カラ」文の背後に条件文があると考えることによって説明できる。すなわち、(32a)を発話した背後には、前提として、(33)のような条件文があると考える。⁹⁾

(33) 会議が終わったら、会議室の鍵を閉める。
次の会議を始める。
一緒に帰る。
会議の話はしない。
……

話し手は、(33)の前件が満たされたことを根拠にして、(33)の後件の実現を暗に求める、というわけである。

それに対して、「ケド」には、このような前提がない。そのため、話し手は、「ケド」を使って積極的に相手に何らかの行為を求めることはできない。あくまでも、条件を提示することによって、結果的にその条件下での帰結を相手に考えさせるという、消極的な働きかけに留まる。

つまり、「言い終わり」の「カラ」と「ケド」との意味の違いは、背後にある暗黙の前提によって帰結が含意されるか否かの違いに帰せられる。

さらに付け加えるならば、「カラ」と「ケド」とは、聞き手の知識の状態についての話し手の側の想定(査定)も異なるようである。「カラ」節の場合は、節の内容について聞き手が知らない想定していることが多い(だから、しばしば終助詞の「ヨ」の意味に近くなる)が、「ケド」節の場合は、相手の知識に関しては全く中立的であって、相手を知っている

ことを承知していても使うことが多い。¹⁰⁾「ケド」の遠慮がちなニュアンスは、このことも影響しているのではないと思われる。

6. おわりに

冒頭の例に戻ろう。

(1) 早苗「会議がもう始まるそうですけど…」

正樹「え? あ……」

この論文全体を通してわたくしが主張したかったのは、(1)に見るような「ケド」節が、「言いさし」ではなく、そこで言い終わっている文である、という点である。言い換えれば、このような「ケド」節は、主節の「省略」の結果生じたものでもなければ、主節の「言い残し」があるわけでもない、主節なるものが、初めからない、ということである。

このことを主張するために、まず、より納得しやすいケースとして「倒置的」な用法、挿入的な用法について考察し、そこで得られた結論が、そのままのような「終助詞的」な用法についても当てはまることを確かめた。

「ケド」節の談話における機能は、「聞き手に条件(聞き手が何かをするための情報)を提示すること」とした。これは「ケド」節に備わった本来的な機能であり、「倒置的」な用法や挿入的な用法に見られる「前言の補足(補正)」という意味合いや、「終助詞的」な用法に見られる「相手伺い」という意味合いは、この本来的な用法から派生的に生じたものであることが明らかになった。

また、「条件の提示」という点では「カラ」と共通するが、「カラ」には「ケド」にない前提があり、その違いが両者のニュアンスの違いを生んでいることを説明した。

この説明によって「完全文」における「ケド」の用法をも首尾一貫して説明できるということは詳しくは論証していない(p.13で簡単に触れた)が、おそらく大きな変更なしで、説明できるものと思われる。少なくとも、「完全文」の「ケド」の用法の説明を考えてからそれ以外の「ケド」を説明しようとするよりも、アプローチとしては確かであろう。いわゆる「逆接」とそれ以外の意味の関係という問題も含めて、今後に残された課題である。

また、「条件の提示」を「ケド」節の本来的な機能と結論したが、「提示」というからには、聞き手存在発話を暗黙の前提にしているが、次のように、聞き

手不在発話における「ケド」の場合は、「提示」という言い方ではまずいかもしれない。

- (31) 響子「(心の中で)今の…五代さんの声に似てたけど……そんなはずないわね。」
(めぞん⑩、52)

これも、いずれ解決しなければならない課題である。

注

- 1) たとえば、益岡・田窪(1992:172)、森田(1989:410)。
- 2) たとえば、国立国語研究所(1951:49-50)、高橋(1993:23)。
- 3) 福田(1994:40-46)も、このような「ケド」節が倒置とは言えないと述べている。しかし、終助詞的な用法とは区別され、終助詞的な用法の方に主たる関心のある彼女にとっては、周辺の用法に位置付けられている。
- 4) 福田(1994)は、3つの用法すべてについて考察しているが、「終助詞的」な用法と、「倒置的」な用法・挿入的な用法を、別のものとして扱っており、3者を統一的に論じる観点に欠ける。
- 5) 倒置構文を「省略」の関わったものとする見方については、宮地(1984)を参照のこと。
- 6) 「含意のキャンセル」という捉え方は、蓮沼啓介氏(個人談話)の助言に負っている。
- 7) イントネーションの重要性については、土井真美氏・長谷川ユリ氏(それぞれ個人談話)から助言を受けた。
- 8) 終助詞的な「ケド」の機能についての福田(1994)および三原(1995)の説明は、本文中に言及はないものの、白川(1993)を参考にしているものと思われる。実際、福田(1994)の巻末の参考文献には、白川(1993)が挙げられている。
- 9) 詳しい議論については、白川(1995:208-211)を参照のこと。
- 10) 「相手の知識の状態についての想定(査定)」という考え方は、蓮沼昭子氏(個人談話)のご教示による。なお、三原(1995:84)が挙げている次のような「ケド」の用法(三原の言葉では「意見求め」)は、このような「ケド」の性質をよく表わしていて興味深い。

[桜田淳子へのインタビュー記事より]

—ある週刊誌のインタビューで、結婚は単に惚れたはれたでするものではないと発言していましたけど。

淳子:私、それは最初からそう思っていたんです。(略)

用例出典

男たち:鎌田敏夫「男たちによるしく」立風書房/
想い出:山田太一「想い出づくり」大和書房/語法:
篠田正浩「日本語の語法で撮りたい」NHK
ブックス/ひらり①:内館牧子「ひらり1」講談社
文庫/めぞん:高橋留美子「めぞん一刻」小学館
(丸数字は巻の数)/ものぐさ:森毅「ものぐさ教育のすすめ」
「NHK文化講演会15」日本放送出版協会

参考文献

- 国立国語研究所(1951)「現代語の助詞・助動詞一用法と実例」秀英出版。
—————(1960)「話しことばの文型(I)ー対話資料による研究」秀英出版。
白川博之(1993)「理由を表わさない「カラ」」、未公刊論文(白川(1995)として後に公刊)。
—————(1995)「理由を表わさない「カラ」」、仁田義雄編「複文の研究(上)」くろしお出版。
高橋太郎(1993)「省略によってできた述語形式」『日本語学』12:10。
福田(現:三原)嘉子(1994)「話し言葉における文末表現の考察ー「けれども」で言い終わる文を中心に」広島大学教育学部修士論文。
益岡隆志・田窪行則(1992)「基礎日本語文法ー改訂版」くろしお出版。
三上章(1955、復刊1972)「現代語法新説」くろしお出版。
水谷信子(1989)『日本語教育の内容と方法』アルク。
三原嘉子(1995)「接続助詞ケドモの終助詞的用法に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要』第2号。
南不二男(1993)「現代日本語文法の輪郭」大修館書店。
宮地裕(1984)「倒置考」『日本語学』3:8。
森田良行(1989)「基礎日本語辞典」角川書店。